

大槻 俊斎 — 多くの人に新しい医療を —

大槻俊斎は、文化三（一八〇六）年、赤井村（現在の東松島市）で生まれました。先祖は移住してきた開拓者で、赤井村の荒れた土地を開拓し、豊かな田畑にした人たちでした。大槻家の次男であった俊斎は、いつも父から先祖が未開の土地を開拓したように自分の運命を自分で切り開いていかなければならないと言い聞かされていました。

そこで、俊斎は人の役に立つことをしたいと思い、医者になり病氣やけがで苦しむ人々を救いたいと考えるようになりました。十七歳のころには、熱心に医学の本を読むようになり、江戸（現在の東京）に出て勉強したいという思いを強めました。

俊斎が十八歳になったとき、兄の援助のおかげで父の許しを得て、江戸に出ることになりました。江戸では、名医と評判の高かった手塚良仙のもとで修業することになりました。そのとき、石巻出身の湊長安や岩手県水沢市出身の高野長英らと出会いました。俊斎は、同郷の仲間と多くのことを学ぶ中で、将来のことを語り合いました。特にこれからの医学では、西洋の学問である蘭学を学ぶ必要があるという思いを強くもつようになりました。

俊斎は三十四歳のとき、手塚良仙の援助により、蘭学を学ぶために長崎に留学しました。このときも数多くの仲間と出会い、お互いにはげましたり自分を高めたりしながら新しい医学を学び続けました。



赤井に建つ俊斎の生誕の碑

蘭学…
江戸時代にオランダ語によって西洋の学術や医学などを研究しようとした学問。

三年後に江戸にもどってきた俊斎は努力を重ね、外科を専門とする町医者として開業することができました。医者になりたいと思いい立ち、二十年間学び続けてやっと達成できたのでした。俊斎は、いつも町の人のことを考えた治療を行いました。しかも、診察の技術も大変すぐれていたもので、たちまち江戸中の評判になりました。

このころ、江戸では毎年のように天然痘が流行していました。天然痘にかかってしまうと、高熱とともに体中にふきでものが出て、命を落としてしまうのです。運良く命が助かったとしても、顔などにひどいあとを残してしまうのでした。この病気の治療法は、江戸では行われていなかったため、人々はどうすることもできませんでした。

すでに、外国では予防するための種痘という方法が発見されていました。日本では、九州で初めてこの治療法が行われました。その後、長崎で俊斎といっしょに蘭学を学んだ緒方洪庵によって、大阪でこの治療法が行われるようになり、多くの人の命が救われていたのでした。俊斎は、この治療法を知っていながら江戸の人を救えないもどかしさを感じていました。

当時の江戸幕府は、漢方医療を重視していたのでした。そのためオランダ語を通じて伝わってきた蘭方医療は、外科と眼科しか許されていませんでした。何とかしたいという思いから、俊斎は、長崎で学んだ伊東玄朴を訪ねました。江戸の人を救いたい、江戸に種痘を行う施設を作りたいという思いを玄朴に伝えたところ、玄朴も同じ思いをもっており、二人は夜を徹して話し合いました。治療ができるようにするための手段、医者をめざしたお互いの思い……。気がつくどすっきり夜が明けていました。俊斎の迷いは消え、晴れ晴れとしていました。



天然痘：
ウイルスが原因で流行し、高熱を発する。熱が引くと、顔面に発疹のあとが残る。当時は、この病気にかかって亡くなる人が多かった。

種痘：
痘苗（ワクチン）を人の体に接種し、天然痘の感染を予防する方法。

さっそく、俊斎と玄朴は江戸中の蘭方医を訪ね歩き、二人の思いを伝えました。俊斎は、蘭方医の今後の役割と医療活動の重要性を熱く語りました。すると、あつという間に八十二名もの医者が賛成してくれました。だれもが俊斎と同じ気持ちをもっていたのでした。

そして、江戸に種痘所を作る計画を練り、幕府に許可を願い出しました。はじめのうちは漢方医らの圧力があリ、なかなか思うようにはいきませんでした。しかし、俊斎や玄朴たちはあきらめませんでした。人命救助という立場から、何度も何度もうったえ続けたことによって、俊斎たちの熱意は幕府の役人の心を動かし、少しずつ理解されるようになりました。

五か月後にはついに幕府からの許可が下りました。念願がかなった俊斎らは、すぐに種痘所を建設するため資金集めをしました。ここでも、俊斎らの思いに共感した医者たちによって、たちまち多くの寄付金が集まり、江戸で最初の種痘所をお玉が池（現在の東京都神田）に作る事ができました。

「よかった。」

と、俊斎はつぶやきました。そして、江戸に出てきて以来、初めて熱い涙を流しました。

俊斎は、たくさんの仲間といっしょに「お玉が池種痘所」の看板を立てかけました。そのとき、俊斎はすでに五十五歳になっていました。

このころ、江戸では天然痘のほかにも、コレリ病が大流行していました。四人に一人の割合で、この病気にかかってしまうほどでした。この病気は、一瞬にして人の命をうばうため、江戸の人々は恐怖におびえ、さまざまな情報が乱れ飛んでいました。薬も祈祷も効き目がなかったため、どうしようもありませんでした。

俊斎は、江戸におけるコレリの流行のすさまじさを正確に幕府に報告しました。そして、西洋医学の知識を取り入れ、さらに自分なりに工夫を加えて、玄朴とともに治療に当たりました。

こんなとき、種痘所の近くで火事が発生して、またたく間に大火となり、種痘所も燃えてしまいました。焼け跡を前にした俊斎たちは、それでも病気で苦しんでいる人を救わなければならないと考え、自宅などをとり

コレリ病：

コレラ菌の感染に

より、おう吐やげ

りなどが続き、亡

くなることもある

病気。

祈祷：

占い師や霊能者、

僧侶などをとおし

て、神や仏に祈る

こと。

あえずの種痘所にしました。

同時に、多くの仲間呼びかけ、すぐに新しい種痘所を作ることになりました。仲間の医者たちも協力してくれる人を必死に探していました。俊斎は、仲間の姿を見てますます力がわいてきました。これまでどおり治療できる日が近いことを確信しながら、病気で困っている人の治療に全力を注ぎました。

のちに、この種痘所は、「西洋医学所」と名前を改めました。俊斎は種痘所でも西洋医学所でも、その初代頭取になりました。俊斎は、人を押しつけてまで頭取になろうとする人ではありませんでした。しかし、これまでの俊斎の働きから、だれもが頭取には俊斎がいちばんふさわしいと思ったのでした。



東松島市保健センターに建つ
大槻俊斎像

大槻俊斎

大槻俊斎は、文化三（一八〇六）年、赤井村（現在の東松島市）に生まれた。長崎で蘭学を学び、天然痘を予防するため、「お玉が池種痘所（現在の東京大学医学部）」を設立し、「天下の名医」とまで呼ばれるようになった。蘭方医学を取り入れた大槻俊斎は、日本の医学界の発展に大きく貢献した。

頭取…
会社などの取締役
ここでは、西洋医
学所の首席。
（代表者）